

改心のシャア

ギモアール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはもしもの話。過去に囚われ続けた男、シヤアことクワトロバジーナが、自身のエゴのために総帥となる道を選ばなかった話。過去と乖離し、果たして彼は、いかにして未来を手にしたのか…

目次

乖離	1
解放	36
新たな目覚め	53

乖離

宇宙世紀0088。ハマーン率いるネオジオンが崩壊する数か月前、ダブリンへのコロニー落としが行われて数日後、中東の連邦軍支配地域。聞こえはいいが実際は疲弊したエウーゴ、地元マフィアと手を組んで略奪や強盗などに手を染める賊とかした旧ティターンズ、そのマフィアと取引する旧ジオン、ネオジオン残党軍の三つ巴になって、治安はひどかった。本来なら取り締まるはずの警察もこの国の貴族が金を落とさないため動きもしない。さらにハマーン軍によるダブリンへのコロニー落としの影響による天候悪化のため、食物の収穫量は激減し、地球規模での食糧不足が発生していた。旧先進国ならまだしも、旧発展途上国であったこの国は、それを改善できるだけの力などなかった。病院などの医療施設はなく、平均寿命は30代と、日本の江戸時代の平均寿命より低かった。学校という教育機関も勿論なく、子供達は自らを養うため、大人にまじってエウーゴの僅かな給与しかもらえない仕事や残飯拾いに出かけて行く。子供も含む人々の顔には希望なんてものはさらさらない。絶望に沈みつつも必死で生きていく。まるで、

「まるで幽鬼のような顔つきだな。こういうのを日本では百鬼夜行と言うのだろう。」

「は？ヒヤツキヤキョウ？」

「いや、なんでもない。しかし、これを見ながら食事など、あまり気分のいいものではないな。むこうにいた時のように、部屋で自分で作りたいのだが、

「申し訳ありません、若様。しかしですな、せつかくこのようなホテルに来ているのですぞ。せめてこの時だけでも体を休めて欲しいのです。どうか老人のささやかな頼みと
：

「わかつている。しかしな、こうも自らの手で料理をしない日が続くと、最早私は自分を何もできないヒモのように思ってしまったな。まるでなかなか親離れの出来ない馬鹿息子になった気分だ。

貧民街と三つの壁を経てるのは貴族街。言葉の通り金持ちが住む楽園だ。食糧不足のぶの字もなく、豪華絢爛な通りである。綺麗な格好をした人々が行き交っている。誰も顔に悲壮感などうつつっていない。この国の総人口の12%がその他を踏み台にしてこの生活を謳歌している。その街でもとりわけ華美な装飾のホテルの三階のテラスで食事をしている金髪にサングラスをかけた青年が、壁の向こうの貧民街の通りを見ながら言った。すぐ側に控えている小柄な老人が答える。会話だけを聞けば主人と執事だが、雰囲気は祖父と孫である。

「そんなこと言いませんよ！しかしですな、これからどんどん忙しくなるのです。若

様のことですから自分だけ休むなど、到底なさらないでしょう。だからこうやって、取引だけだからビジネスホテルでもいいという若様を皆で説得し、ここへと来て頂いたにも関わらず、そうやってまた体を考えないで……クドクド

「わかつた、わかつたよ爺や。なら今晚の食事だけだ。私に作らせてくれないか。ああ、心配せずとも材料は私が

「畏まりました。では材料はきちんと私が買ってきます。

「ち、抜け目のない。私が寄り道でもてくる子供にでも見えるのかな。

「確かにボランテニア活動に参加するのは人として素晴らしく良いことですが、夢中になり過ぎて次の日まで帰ってこないほどの寄り道をなさつたのはどこの誰ですかな？

「く、老人ほど良く口が回るとはよく言ったものだ。

「作用ですな。しかし若様も歳をとればお分かりになりますよ。口が自然と緩んでくる感覚が。

「ふ、いずれな。あと、若様は勘弁してくれと言つただろう、爺や。

「ではなんとお呼びすれば？この前まで使われていた偽名はもうお使いにならないのでしょうか。なら、キャスパル様？シヤア様？それとも、クワトロ様ですか？はて、私はなんと貴方様をお呼びすれば良いのやら……

キャスパル レム ダイクン。ジオン ダイクンを父として生まれた男。シヤア

アズナブルとしてザビ家に復讐するためにジオン公国軍に入り、復讐を遂げたあと、腐敗した連邦であるティターンズに異議を唱えた反連邦政府組織、エウーゴにクワトロバジーナ大尉として所属し、最終的にはそのトップにまで登りつめた。そんな男が、今の街にいた。政治や軍の中枢から離れた、寂れた街に。

「どちらもよしてくれ。この場でなかつたらかなりうるさくなるくらいは私でもわかるさ。」

「人払いを気づかれましたか。流石ですな。」

「…私を舐めているのか？」

「いえいえ。決してそのような事は。少しばかり意趣返しのももりでございませう。しかしいい加減名前を決めてくださらねば逆に不審かと。ずっと若様呼ばわりもどうかと思われませうがな。」

「そうだな…考えておく。だが若様呼びは勘弁してくれ。」

「またそのようなお返事を…爺やは悲しいですぞ。なら、決めないまでは若様と呼ばせてもらいますぞ。貴方様はなかなかお決めにならないから、この爺もなかなか困つて「わかつた、わかつたよ、爺や。今日中には決めるさ。…爺やには本当に感謝している。」

「そのお言葉で十分でございませう。まあ、私は、あの偽名も素敵だと思つてのことだけは、お伝えしておきます。それでは後ほどに。用があればお呼びください。部屋に居ま

すので。

「ああ、わかった。なら持つてきた仕事の1つでも

「でしたら！早くお名前をお決めになるべきでは、ありませんかな？それにこの場に來てまで仕事など……せつかくの皆の好意が無駄になります。貴方様はそこまで薄情な

「わかつている！だから、こうやつてくつろぎながら、考える。これでいいか？たしかに、私もここで仕事とは、少し不謹慎だと思つてはいるさ。……ともかく、のんびりする。「はっはっは！いや、失礼。では、後ほどに。

ガチャ、とドアの開閉音が聞こえた。私は背もたれにもたれてじつと外を眺める。爺やには本当に感謝している。何故なら彼がいなければ今ここに、私はいないのだからな。そう思いながらも外の飢えに苦しむ人々から視線を外さない。いや、外せなかつた。助けを求める、その目から。

時は、遡る。

約8ヶ月前。ハマーンに追い詰められた私は機転を利かしてなんとか満身創痍の百式で危機を乗り越えた。そこまでは良かった。ふ、さすが私だな、と少し自負していた

くらいだ。しかし、本当の危機はそこからだった、

サラミス改の爆破に紛れて生身で脱出するつもりで緊急ハッチ解放レバーを引く。

「なに、ち、私も焼きが回ったか。だが、まだだ、まだ終わらんよ。」

レバーを引くがなにも反応しない。おそらく回線がきれてしまったのだろう。なんとかスラストで脱出を図るが、そのときにサラミス改が限界を迎えた。

最後の爆発からどれくらい経ったか。気がついたら私はシートからシートベルトの限界まで体を前に突き出した状態で宇宙を漂っていた。とてもじゃないが喋れる状態ではなかった。なんとか体を動かして、あと、外れていた右肩を無理やり入れて、シートベルトを外した。コックピット内は非常灯がついていて、全周モニターは衝撃で半分が死んでいた。メインパネルが生きていたのでそこで状態を確認する。

「ち、メインカメラもサブカメラも全滅か。スラストも、推進剤が切れたか。オープンチャンネルでの無線も、機能しないな。SOS信号も…出せないか。ハッチも開かないか。だが空気循環システムは健在、エア漏れもなし。ふ、まさに宇宙漂流記といったところだな。バッテリーの残量は…もって7日といったところか。なかなか悪くはないな。」

機能のほとんどが停止している。が、人間として生きる機能が無事なのは幸運だった。自分の悪運の強さを笑った。生命維持装置を優先させるため、非常灯の明かりも切

る。スーツの空気の消費を考えメットを外す。コックピット内の空気はお世辞にもいい空気とはいえないが十分だった。ふう、と息を吐く。そこまでしてふと、助けが来るのだろうか、と考えた。今までにもここまで追い詰められた事はあるが、救出を待つというのは初めてだった。珍しく不安を感じる。確かにどんな戦争の後には戦後処理と言う名の物資強奪戦がすぐにも始まるものだ。特に金色の機体などすぐに回収されだろうと考える。ジャンク屋にでも拾われるのだろうか。

しかし、もし、だが、外宇宙にまで流されていたらどうする。馬鹿馬鹿しい。どのみち自分は今此処からでれないのなら変わらない。まさしく動く棺桶といったところか。ともかくどうにもしようのないことだけはわかった。宇宙は静かだった。もちろん音などが聞こえるわけではない。戦闘が終わったため、恐怖や激怒のプレッシャーを感じることがないからだ。非常灯も切ってしまったコックピット内はほとんどなにも見えない。蛍光色部分のノーマルスーツが鈍く光っているだけだ。：なにもすることがない。少し眠ろう。今度は無料な気絶ではなく、ちゃんとした睡眠として。

かなり寝ていたと思う。全天周式コックピットは割と広いので、それを活かして少体を伸ばす。ふと空腹を感じて、起きた。非常灯をつけて、ドリンクパックを漁る、が、少しの水しか残っていなかった。

焦ることはない。確かシートの下に非常用食料が収納してあるはずだが、
「ち、見当たらん。アストナージめ、まさか整備をサボったのか？確かに今まで私がこのようにやられたことがないからあまり考えていなかったかもしれない。ふつ、このような事態を考え、普段からもう少し手を抜いて戦うべきだったか。まあいい、まだそこまで腹は空いていないからな。

1人で言つて1人で納得する。なかなか寂しいものだ。まあいい、まだそこまで空腹に苦しんでいるわけではないしな。あわよくばこのままエウーゴを抜けるのを画策してはいたが、アストナージに一言嫌味でも言わないと気が済まん。つと、いかな、こんなことにイライラしては。空気を無駄に使ってしまう。…寝ておくか。連日の激戦の疲れはまだまだ残っているしな。それにこれからのことも考えると…

そんなことを考え始め、シヤアは寝ていなかった。

ちなみに言うがシヤアがもし手を抜いていたらこの場にはいない。シヤアの名誉にかけて言うが、人間 不安には弱い生き物である。

そう言うことなのである。

シヤアが意識を取り戻して3日がたった。バッテリーはあと4日を切った。変化のない現状と閉鎖空間がシヤアを少しずつ追い詰める。

「……く、こうも救出が来ないとはな。一応私はエウーゴの長官なのだぞ？何故組織のトップを助けに来ない？くそ！ブライトはなにをやっているんだ！戻ったら奴の給与を今後一生30%天引きしてやる。勿論私への慰謝料としてな。はっはっは！なかなか想像したら滑稽だな。確か奴は子供が2人いたな。子持ちに給料の減額は痛いだろう。……まあ、私に日本の土下座でもしたら、許してやるとしよう。トップとしての寛容さを見せておけばな。……まさか、アムロの奴、それを察してブライトに探させないようにさせているのか。くそ！アムロの奴め！いくら私に因縁があるとはいえそんなくだらないことまでするとは。はっはっは！見下げた奴だな貴様は。今頃奴は私に言われた言葉をそっくりそのままお返ししてやろうとも思っているのだろうな。はっはっは！これが笑わずにいられはしないな。私がこの程度の危機でパニックになるなど、なかなかアムロのくせに舐めた真似をしてくれるじゃないか。もし奴が同じ状況なら、ララアのもとへ行くのか、となどどほざいているに違いない。……まあいい。君を笑いに来た、とてもいいながら私を助けに来るがいい。上官を助けるのは部下として当然だからな。そんな嫌味を言っても私は許してやろう。アムロ。一生給料5割カットでな。

「……く、まだ来ないのか。何故だ。それだけ発見が困難な場所にいるのだろうか。カミーユ、お前のニュータイプ能力でなら私を探知できるはずだ。早く私を救出しに来

るんだ。今まで色々と助けてやっただろう。いまその恩返しをしてもいいはずだ。そうだ、私に修正してやると殴ってきたことは帳消しにしてやる。エウーゴの幹部候補生にしてやってもいいだろう。私の秘書もどきをしてもらうだけだ。イライラする複雑なことはない、単純な仕事だ。だからカミーユ、早く私を迎えに来るんだ。そうだ、ヘンケンでもエマ中尉でも、カツでも誰でもいい。早く私を救出しにきたまえ。早く私を救出しなければ、誰がエウーゴを率いていくと言うのだ。まさかウオン氏ではないだろうな。冗談ではない！そんなこと、この私が認めんよ！…まあ、あの男にそんな器量はなかったな。私としたことが、少し情緒が乱れていたようだな。全く、思い返せばカミーユといいエマ中尉といい、私という上官に対しての態度が…クドクド

シヤアの顔がセリフに応じて赤くなったり、ふっ、とキザに笑ったりする。全て独り言だ。なかなか追い詰められていた。

「…ふう、話をする喉が渴いたな。水をと、ち、もうなくなつたのか。アストナージめ、奴も給与カットだな。一生4割のな。ん、そういうえば奴と出撃前に何か話していたな。たしか、

出撃間近のアーガマの格納庫。慌ただしくメカニックたちが点検や修繕などで目まぐるしく無重力空間を泳いでいた。私も最後のチェックをコックピットで行なつてい

た時だ。アストナージが話しかけてきたのだ。私は計器を見ながらであったが。

「大尉、非常用食料の場所、ドリンクスペースのよこのキャットスペースでかまいませんか？」

「いや、そこだとドリンクを飲むときに邪魔だな。別の場所にしてくれ。」

「わかりました。ま、大尉なら必要になるとは思いませんけどね、」

「ああ、だから適当な場所にでも頼む。」

「わかりましたよ大尉。では、」

「そうだ！私が言つて場所を変えたのだった！ふ、やはりアストナージは真面目だったな。天引きの件は2割にしてやる。しかし、肝心な場所が分からん。いやまて、続きがあったはずだ、思い出せ。こんなこと、マッドアングラー隊隊員の名前を思い出すより簡単だろう。彼らの顔などスーパールの棚のジャガイモを見て一つ一つに名前をつけるようなものだったしな。」

なかなか失礼なことを言いつつシヤアは頭を抑えて唸る。

「そうだ、たしか！」

「わかりましたよ大尉。では、シートのカッションの下においておきますね。」

「ああ、頼む。」

「そうだ！シートの下だ！しかし既に探していたな、そこは、いやまて、そうだ！シート

のクッションの下だ!!はっはっは!!やはりこんな時でも私は素晴らしい記憶力だな。アムロ、貴様も生まれの不幸を呪うがいい!やはり私はあんな父でも素晴らしい才能を受け継いで生まれたのだ。こんなにも嬉しいと思っただことはないぞ!はっはっは!!アストナージの減給も見逃すでしょう。さて、無駄口を叩いて餓死する前に食事としよう。

私はシートのクッションの留め具を大急ぎで外す。するとあった。銀色の箱が二つある。一つは非常食料で、もう一つはサバイバルキットだ。

「サバイバルキットは後で確認するでしょう。さて、ともかく食料だ。どれ、ん、何だこの惨状は。」

戦闘の衝撃が酷かったのか、バックに封入されていたはずのゼリー状の栄養剤は飛び散っていた。よく見ると箱が凹んでいる。だがそんなことは気にしてられない。やはりアストナージの減給は避けられんな。

「…ち、しかし、食べなければな、スプーンのような食器は…流石についていないか。仕方がない。中東では手で食べる文化があると聞いたが…ええい、ままよ、

シヤアはなんだかんで生まれながらのお坊ちゃんである。手で食事をするなどほとんど経験がないだろう。普段の彼ならそんなことは決して行わないだろう。まずプライドが許さないだろう。しかし、空腹は人を変えるのだ。

「…ふむ、意外といけるな。悪くない。少なくとも士官学校時代の時のものよりかなりマシだな。あの頃のあれは罰ゲームとも言える味だったが、これなら普段でも食べられるだろう。軍隊は胃袋で動く、か、ナポレオンもなかなかうまく言ったものだな。」

私は手をまるでフォークやスプーンのように使って、非常食料を食べる。味は悪くなかった。体力を温存しなければ。これで本当に最後の食事だ。両手をティッシュで拭き、あとは、

「戻ったあとのエウーゴの指針を考えようかと思ったが…寝るか。体力を節約せねば、回る頭も回らんしな。」

バッテリー残量を確認して、非常灯を切って眠る。

「私の命もあと3日か…。そう考えるとなかなか感慨深いものがあるな。ふつ、まあいい。私はエウーゴに戻ったら忙しい日々を送らなければならぬからな。休暇と思えば、なかなか悪くないな。」

灯がつくとも、狭い閉鎖空間に4日も一人でいるにも関わらず、精神に異常をきたしていないのはさすがといったところか。いや、あるいは必ず救出が来ると信じているからか。しかしこの男は今までにどれだけ裏切ってきたかを考えていなかった。そして、そのツケがやってき始めたことも。

バッテリー残量、のこり2日。

「…遅いな。まだ救出が来ないとは。ち、エウーゴ所属全隊員の減給決定だな。コホ、まあ、5割カットで許してやろう。一生だがな。……………くそ！コホコホ！アム口にしろカミーユにしろ、奴らは一体何をやっているのだ！トツプたる私を、見捨てて、まさか、自分たちの力だけでエウーゴを率いていくことが出来るとでも思っているのか？くっはっはっは！コホコホ！それこそまさしく茶番だな。ゲホ！奴らの器量はそんな軍を率いていくようなものではないと言うのに。…もしかすると、そろそろ私に泣き付いてくるかもしれないな。ゲホ！だとしたら、ゲホ！救出された時は、堂々たる態度で救出されてやろう。私は寛容だからな。だから、ゲホゲホ！

ち、のどが乾燥してきたな。喋るのは、ゲホゲホ！控えるか。ゲホゲホ。く、空腹感も、まずだけ、ゲホゲホゲホ！だな。い、今ならゴホ！一つのパンにゴホ！金塊、1ヶースを、く、わ、ゲホゲホ！私が、咳、ゲホゲホゲホゲホ！など、ゲホゲホ、…眠る、か、ゲホゲホゲホ！……………ガク

シヤアの顔はやつれ、疲れていた。声もかなり掠れている。水が切れたのもあるが、喋りすぎていた。文句も程々にして、半ば気絶するかのよう眠る。

バッテリー残量、残り一日。

「な、なぜだ、ガハ！何故、こうも、ガハガハ！き、救助が、ガハガハガハ！！来ないのだ

！……ハアハアハア。くそ！愚民どもめ。私の価値が、分からないのか！……いや、さて。私は既に救出され、もはやアーガマの館内に居るのではないか？いや、そうに違いない。くそ！まさか私の減給の話を気にしているのか！……ええい、背に腹はなんとやらとな。

……………減給の件はなしだ！ボーナスを支給しよう。もちろん私のポケットマネーで支払う。エウーゴの給与とは別にな！諸君らの言い値で払うと私は誓おう！
……………

シヤアは焦っていた。余りにも変化の無さすぎる現状に。もしや本当に自分を助ける気がないのでと。

くそ！あれから五分。何も変わらんでもないか！何故だ！は、そうか！

「アムロめ。ブライトに入知恵したな。くそ！そこまでして私が救助を媚びる姿が見たいか！いいだろう！私はたとえ死んだとしても、そんなことを媚びるつもりはない。何故なら私は、ゲホゲホ！これからのエウーゴをゲホゲホ！地球の未来をゲホゲホ！率いるゴホツゴホツコボ！！

激しい咳こみをして、シヤアは漸く正気に戻る。喋ることの体力消費の激しさを再認識し、声に出さずに考える。

そうだ。私としたことが、みつともない真似を！いくらなんでもブライトとはいえそんな真似はせんだろう。曲がりなりに私も私は長官だ。上司なのだ。戦後のとりわけや

やこしいこの時期に、そんなくだらんことなど気にする暇もないはずだ。それに、回収されていたら私自身も何かを感じていたはずだ。ニュータイプ能力は本人が著しく危険な状態である時ほど発揮するというデータもあるしな。私自身としても実感している。

ならばまだ救出されていないのか。ち、待つしかない。だが私は媚びないぞ。救出の瞬間は、優雅に笑っていてやる。ふむ、いつ救出されるかもわからないな。笑った表情のまま寝てお、く、と、する、…ガク

もはやみつともない姿どころではないものを見せているのだが、特に気にしなかった。シヤアは顔に笑みを浮かべて寝た。いや、やややつれて髪もかなりボサボサして、引きつった笑みを浮かべて気絶した。優雅さなど微塵も感じない物であった。しかし普通の人間と比べてかなりマシなものであった。流星というべきだろう。しかし悲しいかな、依然として状況は変わりもしなかった。

バッテリー残量、残り2時間。

シヤアはノーマルスーツの磁力によってシートに縛り付けられるようにして力無く座っている。顔には笑みなど微塵も感じられない。ただ疲労のみと。しかし絶望の色は見えなかった。

ここまで、来ないとはな。流星の、私も、限界か。いや、どのみちあと2時間、いや、

スーツのバッテリーと、内臓のエアを、考えると、5時間か……くそ！このままでは！

：

これは、これだけ、は、したくなか、たが、

しか、し、もう、手はない。か、カミーユなら、私に、気づいてくれる、はずだ、アムロ、でも、いい。運が悪ければ、は、ハマーンか、

シヤアは自身のニュータイプの特ツシャアによつて同じニュータイプであるカミーユやアムロに呼び掛けを行うつもりだった。もつと早くから出来たのにもかかわらずしなかつたのは、シヤア自身のプライドもさることながら、同じニュータイプであるハマーンにも届くかもしれないからである。ハマーンはシヤアにジオンに戻るように執拗に求めていた。それは父、マハラジャ、カーンの急死により僅か16より指導者として祭り上げられたことの不安か、はたまた恋心か。気丈な彼女が心の奥底に抱えていたものがなんだったのかはわからない。

も、もう、ハ、ハマーンでも、かまわん。ララアよ、私に、手を、貸してくれ、

「ぬ、ぬおおお！」

目を閉じたまま、歯をくいしばつて思念を宇宙へとおくる。側から見れば、死の直前の絶叫のように聞こえる。

カミーユ！聞こえているか！頼む！私を、たすけてくれ！カミーユ！！

……さい……た……すか……

カミーユ！！

感じる！感じるぞ！耳障りなノイズのように小さいが、感じるぞ！ふ、はっはっは！やはり私のニュータイプ能力もなかなかのものだったな！いや、ララーのおかげだな。いや、そんなことを考えている暇はない！早く救助に来てもらわねば！

カミーユ！聞こえているだろう。私はここだ！早く救助に、

うるさいなあ、

な、なんだと！

私はため息をつく。…そこまで嫌われていたか。たしかに私は肅清などと言われ殴られたりしたが、少なくとも私から暴力は振るつたことはなかったはず…いや、そんなことを言っている場合ではない！事態は刻一刻を争うのだ！

カミーユ！過去のことはどうでもいい、早く私を

うるさいなあ、誰なんだこの声は？

な!?だ、誰だと！上司の顔を忘れたのか?!私はクワトロ大尉だ！忘れたのか？

くわとろりたい？誰なんだろう、でも、懐かしい響きがする。

な、何を言っているんだ！カミーユ！早く、私を

うるさいなあ。それより、なんて綺麗な景色なんだろう。

ええい、いい加減にしろ！カミーユ！私は今刻一刻を争う

パアーツで、花火みたいな光も綺麗だったけど、こうやって、満点の星空を見るのも、綺麗だな。時々彗星の尾も見えるし。本当に綺麗だなあ、こんな部屋から出て、早く外で見たいなあ。とつても、とつても、気持ち良さそうだ。ああ、早く出てみたいなあ。

か、カミーユ……………

私は絶句した。思考のそれは、明らかに普段の彼のそれではない。PTSDの類で、精神が崩壊してしまったのだろうか。くそ、こんな状態のカミーユに救助を頼むのは無理だ！

ええい、カミーユ！ともかく今の私の居場所を、ブライトに伝えるのだ！フアでもいい！だから早く

ぶらいと？その名前も、なんだか懐かしいな。ふあ？なんだか、とても心がポカポカするような。

いいから私の位置を伝えるんだ！カミーユ！でなければ、私は

ははは！なんだか楽しい感じだな。こんな感じは久しぶりだなあ。なんだか、ねむく、なつて、

か、カミーユ！まで！せめて！私の居場所を！

おやすみなさい。あむろさん。

なぜよりも寄ってその名で呼んだんだカミーユ！嫌味のつもりか！クワトロ大尉だと言っただろうに！つとまで、カミーユ！寝るな！

くわ…とろ…たい…い…？…

カミーユ!!カミーユ…カミーユ…カミーユ!!

くだらない事を言っている間に、カミーユの意識は再び沈んだ。戦いに疲れた彼は、自身の精神という繭へと潜っていく。果たして、自分自身でしか抜け出せない繭から、彼は抜け出せるのだろうか。

しかし今のシヤアにはそんな事、微塵も考える余裕はない。

「か、かみー…ガハ!!

最後の力を振り切っていたシヤアは気絶した。いくらシヤアでも、極限状況においての精神波に耐え切れなかったのだ。

バッテリー残量、ゼロ

寒さを感じてシヤアは目を薄く開ける。

生命維持装置の、バッテリーが、尽きたか。温度、調節機能が、切れて、しばらく経った、ようだ。空気の、循環も、なくなった。スーツの、つけなければ、な、ふつ、本当に、やきが、まわった、ものだな、ふ、はは、は

のろのろと腕を動かし、手首にあるスイツチをなぞる。ブン！という音とともに少しずつ体が温まる。スーツの体温調節が働いたのだ。声に出さずに、シヤアは自嘲するように笑った。もう、シヤアを動かすものは何もなかった。絶望が、おそう。

「ラ、ララアの、と、ところへ、逝くのか、私は。ララア、私を、みちび、いて、くれ：

あれだけアムロに言っておきながら、結局自分も言うことになったセリフを吐いて、シヤアの意識は沈む。深く、ふかく、フカク、ふかくふかくふかく。

シヤアは目覚めた。自身が、スーツの暖かさとは別の暖かさに包まれて。目を開けると、自身はノーマルスーツでなく私服のまま、宇宙空間のような、瞬く星の流れの川に、浮かんでいた。輝く星の流れは、人の生命の輝きのようであり、それがまさに、流れる人生のように、ながれ、向かうべき場所へと向かっているようだった。その流れに逆らうかのように、シヤアは漂っていた。

こ、これは、ふ、どうやら本当に、ララアのもとへ来たようだな。アムロ、私はララアと過ごしながら、貴様がエウーゴにこき使われながら、すり減って死ぬザマをここから高みの見物とさせてもらおう。ふ、いい気味だな、はっはっは！！

…大佐…

ら、ララア!!

そんな美しいという言葉では表しきれない場所に居ながら、シヤアはなかなか下衆なことを考えていた。まあ、今まであんな状態で、かつ、ララアに逢えるという喜びの所為であろう。ララアの声が聞こえて、シヤアの目の前に光が凝縮しはじめる。そして一際大きくなったのち、光がひき、ララアがそこにいた。天女の羽衣のように、いつも彼女が着ていたワンピースをはためかせて、光の川を泳ぐように漂っている。シヤアにとつて、彼女は自分を迎えに来た天使に他ならない。

ララア！ああ、やはり来てくれた！やはり、私には、ララアしかない!!この、溢れるような母性、包まれるような母性、やはり、ララアは、わたしの母たる、

大佐…

なんだい、ララア！

ああ、あの時に戻ったかのようだ！声を掛けられたただだが、ふ、思春期の少年のように舞い上がってしまったな。はっはっは！私にも帰る場所が、ララアが迎えてくれる場所があつたのだ！こんなに嬉しいことはない！

シヤアは一人でテンションマックスになっていた。ララアの微笑みの温度がだんだん冷たくなっているのにも気付かず。

大佐、俗な言葉で言わせてもらいますわ。

なんない！ララア！私への愛の言葉ならどんな言葉でも構わな

キモい、ですわ。

そうか！そんなに私を愛して……なにい！！

私は驚愕した、ララアからの愛の言葉以外何もないと思つていたところに、な、なんと低俗な言葉が、いや、それよりも、ララアがそんな言葉を使うなんて、バカな、ありえない、まさかアムロ！貴様、余計な言葉をララアに教えたのか！ええい、今からでも間に合う！ララアの言葉遣いを矯正して

シヤアはシヨックを受けた。ララアがそんな言葉を使つたことに対して。しかしそれよりも気づくべきことがあつたのだ。誰に対してなのかということ、である。

大佐？何を考えていらつしやるのですか？

……ちなみにいうと、これは精神波におけるの対話であり、思念体であるララアはシヤアの考えなど読めていた、が、あえて声に出して聞いていた。彼女もなかなか女ということだろう。

ら、ララア！何があつたかは知らないがそんな言葉を

大佐、これはそういう話ではありませんよ。私はさつきな言葉を、誰に対して使いましたか？

ん？それは…

ここに居るのは私とララアだけ。つまりララアが伝える相手は対峙している私ということになるが。はっはっは！そんな訳があるまい。私のどこが、ここまでに見事なルックス、才能、八方美人、どこをとつても完璧な私にキモいなどという低俗な言葉が当てはまる訳があるまい。…すると、誰だ？今私しか、は！そうか！わかったぞ！

はっはっは！！ララアもなかなか言うようになったのだな！そうか、普段から奴はララアに泣き付いていたのか。くそ！なんと羨ましい！たしかに奴の方が優れてはいたが、今なら互角のはず…おっと、話が逸れた。私が他人を妬むなどと、すまない、ララア。奴のことになるとすぐ頭が

アム口のことではありませんわ。大佐。それにアム口は泣き付いたりなどしてはいませんわ。それは大佐の願望ではなくて？

はっはっは！ララアには何でもお見通しだなっつ、なに！アム口ではないのか！では、誰なのだ、まさか、か、カミーユか？まさかハマーンではないだろうな！危険だぞ、ララア！私とならないが、ほかの連中だと危険が

私としては大佐の方が危険な気がしますけどね。

な、何、ナニ、なに、を、ラ、ララア？

ふふ、少しからかい過ぎましたね。あまり時間もありませんし。

そう上品に笑いながら話す。ラレアの微笑みは美しい、が、この時ばかりは私でも額から汗が流れるのを感じた。いや、精神世界において汗など、く、な、何故だ、今のラレアに、母性が、感じられない!?!こ、この、まわりつくようなプレッシャーは、な、なんだ!?!ま、まさか、いや、そんなはずはない。そんな筈が

大佐の想像通りですよ。私は、あな た に

キモい と、言っただですよ。

があああああ!?!

シヤアは絶叫した。顔は、ゼータに突撃された時のシロツコのような顔だ。

な、な、ななな

大佐、いつまで私を求めているのですか。もう何年経っているではありませんか。いつもサングラスで顔を隠して他人と自分は違うという感じを出しておきながら、いつまでも女々しいことを言っているなんて、私の知っている大佐ではありません。それに私を母などと…これをキモイと言わずしてなんと言うのでありましょうか。

が、ががが、そ、それは

貴方にはきちんとした母がいたでしょう。愛していた母が。その方に失礼です。

母、アストライア レム ダイクン。ああ、たしかにあの人は私の母だ。しかし、成長したからこそ、感じる母性もある。そうだ、そうだとも!

確かに私の母は一人だけだ。しかし、歳をとつてからこそ感じる母性があるのだ。それを

それを、まだ齡 16の幼い私に求めるとは。大佐、もしかしてろりこんですか？

な！あ、ろ、ろ、ろろろろ、ロリコン、ろりこん、私が、だと、

ロリコン。ロリータコンプレックス。性的な対象が少女であること。くらいはシャアも知っていて、混乱した。

わた、私が、そ、そんな、私がララアを好きだったのは、私がロリコンだったから、そ、そんな、そんな、バカな!?む、ララアが笑っている。はあ、天使の微笑みだ、いや、違う！あれは馬鹿にしている笑いだ！コンスコンとアム口の戦闘を見ているときにしていた笑いだ！…む、よく考えれば、なにか、は！そうだ！ララアはある種永遠の16歳だが、わたしは歳をとつていてではないか！そうだ！ララアと出会った時、わたしも若かったのだ！はっはっは！危なかったな、あわよくば私はララアにロリコンの認定をされてしまうところだった。私はロリコンではない！ロリコンではないぞ！ララアだからこそ、愛したのだ！そうだ！

ララアは薄ら笑いを浮かべている。重ねて言うがここは精神世界に等しく、シャアの考えていることはもれなくララアに伝わっている。そして何より、出会った時はまだしも現在のシャアは29である。かつ、16歳の少女に母性を感じるなどと言っているの

だ。そんなことで自分を正当化するシヤアを、ララアは笑っていた。

ララア、私はロリコンではないよ。ララアだからこそ、愛したのだ。わかつてくれるだろう、私のララ

ええわかつていますよ、大佐。

な、なぜ最後まで言わせてくれんのだ。いや、わかつてくれたか。流石わたしのラ何故なら大佐は、今まで何人も女性を抱いてきましたものね。

最後まで言わせて………な、ななな、な、あ、あああ、あ、あああ!

俗な言葉でいうと、セックスしたんですよね、たくさんの女性と、たーいーき。ふふ、シヤアはシヨックで言葉を失った。ララアがそんな下品な言葉を!というのもあったが、それよりも自身の女性関係をララアが知っていたことのシヨックが大きかった。

そ、そんな、ララア、君は、純粋な君が、そんな、俗なことを、いや、それより、な、何故知っているんだ!くそ!なんと言えばいいんだ!こんなことなら、誰かに浮気をした時の謝り方を聞いておけばよかった!しかし誰に聞けばよかったのだ!アムロか!いや、奴に聞くくらいなら死んだ方がマシだな、それに奴は浮気以前にそんな浮ついた話の一つもできやしないだろうな。ならばカミーユか?いや、年下に聞くのはな、流石にわたしのプライドがな。それに若すぎるから経験すらないだろう。ううむ……

シヤアの想像は間違っていた。アムロには直近なら、ベルトーチカとかなかない関

係でやっているのをシヤアは見ていた筈である。カミーユもカミーユで、フアやフォウ、ロザミイとなかば三角関係？のようなものであった：しかしまあ、この二人がまともな返事を返すことは期待できない気もするので、シヤアの判断はあながち間違いではなかった。

ブライトは：どうもな。は！：そうだ！ヘンケン艦長だ！奴なら知っていそうだな！彼女を前にして、ふ、君のための練習をしていたのさ、とでも言っていただろうな。：いや、待て！これだ！このセリフだ！これしかない！はっはっは！我ながら素晴らしいセリフだ、ありがとうヘンケン艦長、貴方のことは忘れんよ。

シヤアはまた顔面に喜色を浮かべた。

ララア、確かに私は何人との女性と関係を持つてしまった：しかし、それらは全て、君のための練習だったのだ：私は君を愛しているからこそ、それを

あら、大佐、私は何人との女性と関係を持った事を責めているわけではありませんよ。そ、そうなのか！なら！

私は関係を持つたにも関わらず、そして、相手が大佐を愛していたにも関わらず、さも知らぬとあつさり捨ててしまったことを責めているのですよ。

グハアアア!!

敵の名前の、三種の神器を食らったシヤアは気づかなかった。

シヤアはボロ雑巾のように倒れ伏した、いや、水死体のように浮かんだ。この姿を見て誰もあのシヤアだと気づかないであろう。

もう、ララアにも、見捨てられた。いや、見捨てられて当然だ。私は、それだけのことを、してしまっただけだから。よりによってアムロ、か、いや、アムロの方がララアにふさわしいな。私などよりも…

呆然と、生気をなくしたかのようにシヤアは漂っている。……カシヤ!

それを見て嘘泣きをやめたララアがクスクスと笑いながらシヤアの顔をデジカメで撮っている。…悪女としか言いようがないのだが…

大佐…

ララアがシヤアに膝枕をする。顔を愛おしそうに撫でながら語る。

少し、言い過ぎましたね。

ラ、ララア…

シヤアは優しげなララアの表情を眺める。そのシヤアの瞳には、ララアを母として見ていたものはなく、ただ単純に、愛する女性に対して向けるものがあつた。…少し鼻の下は伸びてはいたが…

あんな言い方をしましたけど、私は今でも大佐を愛していますよ。

ララア！

だから大佐、一つお願いがあります。

な、なんだい、ララア。

もう、私を見ないで下さい。

つつつ!!な、何故!?

私とは、過去なのです。過去、過ぎ去ったもの、遺るもの、変わらないもの。それが私ですが、大佐、貴方は未来なのです。私は過去でしか生きられません、が、貴方は未来で生きています。いつまでも私を見ることは、望むことはできないのです。

…ララア：

だから大佐、私を見ないで下さい。愛さないでとは言っていませんよ。私は貴方の愛を否定しません。何故なら私も、貴方を愛していますから。でも、だからこそ、私は貴方、キャスパルであり、シヤアであり、クワトロでもあつた貴方には、きちんと過去を捨てて、未来を生きて欲しいのです。憎しみや悲しみという過去を背負つて戦う戦場ではなく、未来を。ほら、大佐にも見えるでしょう、人の可能性、時が：

ララアが差し出す手の方には、優しい光が広がっていた。光の川の、流れのもと、眩しく、眩むほどに、優しい、光、未来が。そうか、わたしにも、見えるのだな。なんと、な

んと、優しい、しかしわたしには眩しすぎる。この光を、自身の過去のために多く奪ってきた、わたしには。

それは違いますわ、大佐。今までの大佐なら、です。

ラアラがわたしの正面にまわる。

しかし、ラアラ、私には、もう、何を成せば良いのか、わからない、どうすれば、よいか…

ふふ、簡単ですよ。今度は貴方が、これからの、大佐でもなんでもない、未来を生きる貴方が、それを救えばよいのですよ。

しかし、どうやって!?私を担ぎ上げるものは、所詮、薄汚い野心しか持っていないのだぞ!!

なら、貴方自身が始めたらいかがですか？
な、

誰かに担ぎ上げられる前に、自分だけの力で始めてしまうのです。そうすれば問題ないでしょう？

し、しかし、私に、そんな、ことが、
くす、と優しくラアラは笑った。

安心して下さい。貴方に力を貸してくれる人が、すぐにでも現れます。いえ、貴方を

導いてくれる人、の方が正しいかもしれませんね。

ララア：

私とララアの周りの光が、徐々にまぶしくなつてゆく。

…時間…：…なのだな…

はい、大佐。

ララア。

私はララアの名を呼び、しっかりと肩を抱き、見つめる。

私はこれから、未来を生きる。しっかりと、力強く。もう、振り返ったりはしない。だからこれは、せめてもの、贈り物だ。

そう言つて、私はララアにキスをする。特に情熱的なものではない。優しい、贈り物のように。そして互いに見つめ合い、微笑み合う。

うふ、大佐、キザなところは相変わらずですね。

ふ、素晴らしいと言つてもらいたいな、ララア。

では素晴らしい大佐はもう、女性を捨てませんね？

ぐ！あ、当たり前だろう！わ、私はもう、そんなことはしない！ララアに誓おう！

ええ、なので私も安心できます。安心して、行つて来ます…

…わかった。私も行くでしょう。

シヤアはこれまでにないほど清々しい笑みを浮かべている。今までのシヤアを知る者から見たら、憑き物が取れたとでもいうだろう。

目には決意と、明日への希望さへ浮かべているのだから。そんな二人の体も、どんどもまぶしくなつてゆく。終わりの時は近い。いや、これは終わりではない。シヤアとラア、二人の、始まりなのだ。

ふふ、大佐、こういう時は、いつてきます、と、いうのですよ。

ああ、そうだったな。…いつてきます、ラアア。そしていつてらつしやい。君も、幸せに…

ええ、行つてらつしやい、大佐。私が愛した、優しい人…

眩い光で何も見えなくなり、シヤアは現実へと、未来へと帰つてきた。

「…ラアア…ありがとう…」

シヤアは目から涙を流す。しかしそれは、悲しみの塊ではなかった。明日へと、未来へと生きるために、せめてもの、過去に向けた花束だった。いつてきますと出ていった過去は、メットの外へと流れて行く。

カシユン、プシユー

流れる涙が止まった時、スーツが外部の酸素濃度の低下を感知して自動でメットが閉

まる。まるでそれが、流れ出た過去と自分を乖離しているように、シヤアは感じた。そして満足気に眠った。残り時間など毛ほどにもきにせず。

解放

シヤアとララアが別れた時、その、ほぼ、同時刻、地球の、カラバが所有するとある基地の士官用室に、アム口はいた。哨戒任務の終了の後、明日へ備えるために寝ていた。軍人は休むことも仕事である。色々な機材や配電盤やコード、脱いだままの制服等が散らばる中、無理やり開けたスペースにポツンとあるベッドに無頓着に寝ているのは、アム口らしいと言えるだろう。そんなアム口のもとに、別れを告げに来るものが現れる。

きらめく星の流れの中をアム口は漂う。目を開けて状況を理解したアム口は顔に洗面を浮かべる。

ち、また、ララア スン なのか。もうおれは、見ないと思っていたのだがな。過去の、幻など。おれは、もう彼女に対して、なんの感情もないというのに。くそ！

アム口はそう考えながらも、己の心にあるわだかまりが、罪の感情が、後悔が、頭から離れなかった。そう、アム口も囚われていたのだ。過去に自分が侵した、取り返しのつかないことに、過去に。

でも、未練はあるのでしょうか？アム口、

ララア スン!!やはり君か！

懐かしい声とともに、目の前に光が凝縮し、ララアが現れる。サイド6やニュータイプ同士の時に見た、姿のままだった。当然だ。：死人は、成長など、しない：

ふふ、寂しいわ、もう、ララアとは呼んでくれないのね。

俺は過去を振り返らない！奴とは、シヤアとは違う！だから！

ふふ、おかしな人。なら何故こうして私はここにいるの？重力の井戸にこもってまで、私に会うまいとしていた、あなたのところに。

く、：

俺は言葉に詰まってしまふ。そうだ、現にララアはここにいる。俺は、まだ、囚われているというのか、僕は：

にこやかに微笑むララアと対称的に、澁面を濃くするアム口。しかし、苦澁にまみれながらも、アム口は決意する。

：そうだ、言わなければ、決意しなければ。そうしなければ、俺も、ララアも、救われない。過去に囚われたままでは、未来へさえ、進めない！

：ララア スン。たしかに、僕は逃げていたよ。宇宙に上がったら、君と会ってしまふうんじやないかという、不安から。僕は、本当に取り返しのつかないことをしてしまつたという、後悔から。だがもう、全ては過去だ。進みゆく今に、必要のないものなんだ。：ララアスン、君は、君は、死人なんだ、過去なんだ。君は今人に、未来に関わっては

ならないんだ!……俺ももう、未練を捨てる。そうしなくちや、君も俺も進めない!君は永遠に僕たちの間を彷徨い続けさせされ、俺たちも永遠に囚われ続ける!それは人間の生と死への冒涇だ!だから!俺は君を、過去を振り切つてでも、未来へ、明日へと進む!君はあの時、刻が見えると言つた!だから!俺も、未来を見る!!だから!

ふふふ、アム口、あなたは始めから囚われてなどいないわ。

な、何?!で、では、これはなんだ!

これは、私が望んだこと。

望んだこと……だと……

馬鹿な、囚われていないのだったら何故こんなものを見るんだ!?!訳がわからない!!

私はあなた達を、未来をずっと見ていたかつた。でも、それは間違つていたの。私が見ている限り、あの人は私に、過去に囚われ続けている。それでは、あの人も、貴方にも、一生未来が、来ない。希望のなく、悲しみに満ちてしまったままに、死んでゆく。それでは行けないと思つてしまったの。だから私は大佐に話したの。私を、過去を、振り返らないで、と。……もう、あの人は囚われていないわ。未来を、明日を見つめているわ。私も未来を見るために、行かなくてはならないの。だから、これで、最後。

最後……だと……

ええ、これで本当に、最後だから……

その時俺はようやく気づいた。ララアの笑みには今までにない清々しさと、希望が、満ちていた。そこに死人のような儂さは感じられない。永遠を彷徨う悲観もない。まるで、ただ明日を楽しみにしている、少女だ。

ララア スン、君は、な！

ララアの体がだんだんと光に包まれる、いや、光に分解、というのか、ともかく徐々にだが、消え始めていた。

ええ、こういうことよ。私は漸く、逝くべきところへと逝くみたいね。

は！…：そういう…：ことか。…：すまない。俺は、酷い言い方を…

気にしなくていいわ、アム口。むしろ嬉しかったわ。

嬉しかった？

ララアの言葉の意味がわからない。でも、聴き入っていた。過去に頼らないと言ったばかりなのに、だが、これを逃したらもう、聞けない。直感的に、分かる。

ええ、私という過去にすがらずに、私の言葉を忘れずに、進んでいくあなたを、見ることができたから。アム口、貴方は強い人よ。

おだてないでくれ。俺は…：まだまだだ。

ふふ、そういう風に自分を認識できる人を、強い人と言うのよ。自分を理解し、優し

くなり、時に厳しく。なかなかできることではなくて？

確かにそうだが、俺はまだ、いや、いつまでもそこに至れないだろうな…

ふふ、完璧など求めなくていいのよ。今の、あなたのままで、ね。アム口。私は幸せだわ。あなた達を…未来を…見れて…

ララア スン……

ララアは涙を零しながら笑っている。その涙も、光の中に霧散していく。あと僅かなのだろう。

俺から1つだけ言わせてくれ。ララア スン。

君と、出会えて

アム口、こんな時にも、そんな言い方をするの？いくらなんでも、それは酷くてはなにかしら？

うっ、

ララアの言う通りだな。全く、俺は気が利かないな。…しかし、なかなか気恥ずかしいものがあるな。まあいい。

…アム口は気づいていないわけでもないが、ここは精神世界にも近い。自分自身の中では普通にララアと呼んでいることに、アム口は気づいていなかった。そして、そんなアム口の心が見えるララアがそれに気づき、ほくそ笑んでいることも…

：ララア、俺は、僕は、君に出逢えて、本当に良かった。楽しいこと、辛いこともあった。それに囚われることはもうないが、君のことは、忘れない。しまっておく。僕の、心に。だから、その、なんだ、あー、元気でな。向こうに行つても、風邪とかには気をつけるんだ、君のその格好は、どうもその、心配だ。せめて上にコートくらいは羽織つてふふ、ふ、ふ、あはははは!!ふふふふふ、あははは!!

突然ララアが爆笑しだす。な、何故だ!途中で言葉に詰まったからか?!俺がこういうことに慣れていないことくらい、君は知っているだろう?そこまで笑わなくてもいいじゃないか!

く、そこまで笑わなくてもいいじゃないか。俺は真剣に言ってるんだぞ、なのに

あは、ふふふ、ごめんなさい。ふふ、ついおかしくてね。ふふふ、まだまだあなたも純粋なのね。いえ、素直、正直者?、真面目?なのかしらね。ふふ、ともかく、とてもアムロらしいわね、本当に。

何を言つて…あ!

そうだ、さつきは死人とまで言つたのに、それを、元気でなだと…俺はガキか!全く、ララアの前では、どうも調子が狂うな。俺らしくもない…

アムロはもう、大丈夫ね…安心したわ。

アム口は少し顔を赤くして頬をかいている。そんなアム口を見てララアはほくそ笑む。俺らしくもないと思いつつも否定しきれしていないアム口を嬉しく思っているのだ。それは、周りの状況のせいである種不完全な大人になりかけていたアム口の中に、まだしっかりと、優しくも不器用な、アム口が残っていたことに他ならないからである。

ふふ、ララア、君には相変わらずかなわらないな。頭が下がりつばなしだ。君と話していると、まだ僕がガキだったことに気づかされるよ。まだまだだな。僕は。

それは違うわアム口。言ったでしよう、素直、真面目、それらはあなたのいいところよ。決して過去の自分として見て、捨ててはいけない部分だわ。大人になるとはそういうことではないと、あなたが一番、よくわかっているはずよ。

…そうだな…

自分の両親のことが、特に親父のことが、頭を揺さぶるように思い起こされた。そうだ、それを捨ててしまったら、親父のような人間になってしまう。…つくづく、ララアには頭が上がらないな。

ありがとう、ララア。ララアに言われなければ、俺は、おれでなくなっていたかもしれない。気付けて、よかった…

俺は心の底から喜んだ。こんなこと、久しぶりだ。懐かしい、あの、アバオア クーで、みんなのもとへと、帰れたような。

ふふ、貴方なら私が言わなくとも、それに気づくことはできたわ。それに、私が笑ったのは、他にもあるのよ。

…ん？

もう、特に笑うところなど…わからない。なんなのだろう。

貴方がいいお父さんになりそうねと思っただからよ。

お、お父さん!?、？

アム口は仰天して、顔を赤らめた。

お、お父さん!?お父さんって、親父、父親、パパア!?どど、どういう事だ!?なぜ、おれが?さっぱりわからない!

な、何故…

だって貴方、風邪がどうか、服装がどうかかゆってたでしょう?あの時の貴方の顔や言葉から感じるものは、大事な娘が心配で仕方ない、という優しい父のものだったわ。とても、心地が良かったわ。貴方は絶対に、いい父親になれるわ。

あ、ああ。あの部分か、それは、その、歳上として、その、義務というか、ブライトやハヤトなら、こう言っていたような、いや、その前に、まだ俺は若いのに…いや、そろそろ結婚している歳か、ともかく、その、それはな、いや!まず君の服だ!やはりそんなひらひらした服は、なんというか、言いにくいのだが、その、肌を見せすぎだ!もつ

と自分を大事にしてだな…それに生地も薄すぎる！ニュータイプだからと舐めていたら、本当に風邪にかかってしまうぞ！今は夏なんだから、いや、季節はないか、だがなララア！風邪は油断禁物なんだぞ！この前、俺の同僚がな…

ふふ、そういうところが父親っぽいよ、アム口。すこし、羨ましいわ…

顔を赤らめたままブツブツ言っているアム口をよそに、ララアは笑う。孤児院出身のララアには父親の記憶というものがない。だが、アム口から感じるそれには、知らないはずの父を、父性を感じたのだ。ララアにはとても暖かく、眩しく感じた。

ほんと、大佐とは真逆なのね…はあ、

だからな、ララア！…大佐？シヤアがどうかしたか？

いえ、なんでもないわ、アム口…

…？俺の話が長いか？しかしだなララア、俺が言っていることはとても大事なことなんだ、だからな、そんな風のため息などつかずにもっと…クドクド

アム口はララアのついたため息と、疲れた表情とが、シヤアに繋がらなかつた。代わりに自分の話がいから面倒だと受け取って、また話を続け始めた。いや、これは説教か…もはやただのララアの父ではないか…

ララアはアム口と真逆すぎるシヤアに対して、呆れていた。たしかにシヤアは両親の

愛を受ける期間が短かった。しかし、それはある意味アム口も同じである。その飢えた愛情を、母性を、母どころか両親すら知らない自分に求めるなどと：ため息をつくのも当然である。しかし、なんとも奇妙な関係だ。片方の男は少女に母を感じ、その少女はもう片方の男に父を感じる。：やはり、シヤアはロリコンなのだ。そうでなければ、ここまで奇妙にはならないだろう。

ふふ、本当に羨ましいわ。

少しはまともな服を：羨ましい？何がだ？

説教、もとい、話しを中断されたアム口は、ララアの笑みに違うものが含んでいると感じて、話を止める。

ん？どうしたのだろう。ララアの笑みに、若干の儂さ、いや、嫉妬？どちらもがないまぜになつて浮かんている。一体、どういう：

ええ、羨ましいの、私は。貴方の子供がね。

子供？

ええ、貴方という、優しくて少し心配しすぎな父を持つて産まれる、子供がね。：わたしも、貴方のような父が、家族が欲しかった：

ララア：

俺は、ララアの言葉に、感情に、心に、過去を感じた。でも、だからこそ、言わねば

…
あつちで、探せばいいさ。きつと、きつといる。君を、愛してくれる、父が、母が、家族が…必ずいるさ。そうでなければ、君は、ここにはいないだろう？

アム口……

ララアから涙が溢れる。だが、それは悲しみではない。漸く見つけた、希望のような、とても大切な、家族のような。ふ、とてもいい顔をしている。吹っ切れたような顔だな。今まですつと、抱えてきたのだろう。俺はララアを優しく抱いて、ララアの涙を拭う。側から見ればこれは、父と娘にしか見えなかつただろうなど、頭の隅で考えた。父と言われるのも仕方ないか… 少し笑ってしまった。ララアが泣いているのにな… 笑う、笑顔、そうか！

ふふ、そんな顔をしていたら、家族に会った時、悲しませてしまうさ。ほら、笑って。君には笑顔が似合う。だから、とびっきりの笑顔で、会いに行けばいい。今まで会えなかつた分、とびっきりのな。

…アム口…

ララアは涙を流すのをやめる。そしてゆっくりとだが、笑い始める。いい笑顔だ。やはり、君は笑っている方がいい。

落ち着いたかい？

ええ、大丈夫、ありがとう、アム口。

いや、構わないさ。それよりそんな素晴らしい笑顔を、早く君の家族に見せてやらないと、な？

ええ、そうね、ありがとう、本当に…

俺は少し前から、だんだんと、俺たちの周りの光が眩しく、霧散しているのが増えているのを感じていた。…おそらく時間なのだろう。口には出さない。それに、早くラアを家族にあわしてやりたいしな…

それではな、ララア、行ってくるんだ、家族のところへ、君の家へ。

ええ、でも、最後に、ひとつだけお願いがあるのだけど…

なんだい？説教が長かったことなら謝るが、こればかりは君の為だからな、短くするわけには

いいえ、それじゃないわ

じゃあなんだい？

お父さんって、呼んでもいい？

え？俺のことか！

ララアは顔を赤らめて、こくと頷いた。意外だった。おれはララアの言葉に驚いたし、少し嬉しさも感じた。が、しかしだなあ、

しかしだなララア、君はすぐにも本当の家族に会うのだぞ。それに、その、俺が君のお父さんに対して、気まずいのだが…

わかってるわ！そんなことくらい！でも、アムロが、ほんとに、お父さんみたいなの。お願い、今だけでいいから！お願い！

うっ、

ララアが上目遣いでおれを見て、懇願する。くそ、そんな頼み方をされたら、頷くしかないじゃないか！娘に強請られて、おもちやを買ってしまう父とはこういう感じなのか…

恐らくアムロも、そういう父になるのだろう。

分かった、分かったよ、ララア。

ありがとう！アムロ、いえ、お父さん。

そう言つて、ララアは俺に抱きついてきた。俺は殺しきれない勢いに苦笑しながらも、優しく、ララアに語る。

ララア、元気だな。向こうに行つてもしっかりと頑張るんだぞ。おれ、…お、お父さんも、お前のことは、ずっと、愛している。だから、信じているから、しっかりとやつてこい。それと、その、向こうのお父さんに、すまないと言つておいてくれ、やはりその、気にしてしまうからな。ともかく、しっかりと家族を愛して、お前も愛されてこい。お父

さんは、お前の幸せを、いつも、いつまでも、祈っているからな。だから、安心して、行ってこい。

はい！わかりました、お父さん。めい一杯、愛して、愛されてきます。だから、お父さんも、新しく、愛する人を見つけてね。お父さんなら、いい人はきつと見つかるわ。本当よ。だから、行ってきます、お父さん。

ああ、行ってらっしゃい、ララア。

お父さんもよ？行ってらっしゃい。

ふ、そうだな、行ってきます、ララア。

ふふ、ふふふ、あつはつはつはハツハツハー！！

二人は真剣な顔で、優しい笑顔で見つめあつて、語り合つてから、どちらともなく笑いあつた。清々しく、希望と、未来に満ちた、笑いだった。光は眩しさを増し、だんだんお互いの顔すら、見えなくなるほどだった。

ララアが俺から離れていく感じがした。ほとんど見えないが、ララアが行くのだろう。未来へと、家族の元へと…少し名残惜しいような、悲しいような、そうか、娘を見送るとは、こんな感じなのか…なかなか、悪くないな。ララアが少し離れて、こちらを振り返つたような気がした。

ありがとう、アム口、でも、あなたも本当に、早くいい人を見つけて、父親になつて

欲しいわ。

ふ、出来たら苦労しないさ。

そんなことを言つて…ん、

どうした、ララア？

ララアが何かに気付いたように、あらぬ方向を見つめる、気がする。もはや何も見えない俺には無理だが…

あら、そんなことを言っているけど、もう少ししたら、現れるようね。ふふふ、面白いわね。本当に、ふふふ、アムロ、あなたの時が見えたわ。

な!? そ、それは、ララア、どういう!?

それは、貴方自身が、確かめることよ、お父さん、ふふふ。……本当に、ありがとう、アムロ。私と、分かり合えた、私を、思ってくれた、人……忘れないわ……

ララア!!

ララアの言葉を最後に光は最高調に輝く。俺は、ただ、見送った。ララアの名前を叫んで。これ以上、言葉はいらない。何かはぐらかされた気もするが…

「は!!!」

俺は跳ね起きた。少し汗をかいてはいたが、気持ちの悪いものではなかった。窓の外はくらい。時間をみると、まだ2時だった。さつきまで見ていた幻、いや、幻ではない、ララアとの会話を思い出す。

「…そうか…本当に…ララアは行ったのだな…」

ララアの感じがしない。衰えはしたが、かなり戻ってきた俺のニュータイプとしての勘が、ララアを捉えられない。今頃、家族と楽しく過ごしているだろうか。

「…考えても仕方ないか…ん？これは、」

俺はふと、目もとに違和感を感じ、触れる。液体の、冷たい触感がした。

「…泣いている…のか…ふ、ララアには、本当に感謝しないとな。」

俺は泣いていたのだ。自分でも、全く気付いてなかったが。だが、これは悲しさではない。ララアをきちんと見送れた、安堵だ。

「まあ、少しは、父親としての寂しさもあるが…な…」

眠気が急にやってきて、逆らえずに、眠る。俺も頑張つて、明日を生きなきやいけなからな。…そういえば、ララアが最後に言っていた、あれは、どういう…

翌日、いつもより少し遅く食堂にやってきたアムロをみて、同じ隊の隊員だけでなく、みんなが目丸くした。いつも影を含んだ笑みを浮かべているのに、今日はそんなとこ

ろを露にも感じさせないほど、快活な笑顔を見せていた。見惚れた女性隊員まで現れる始末だ。仲のいい隊員がアムロにどうしたんだと聞くと、娘を見送る父親の気持ちかわったのさ、とだけ言っただけで席に着いた。そんな爆弾発言を皆んなが聞き逃す筈がない。当然ながら周りは騒然となり、阿鼻叫喚の地獄となったのは、いうまでもない：

新たな目覚め

暖かい。ただ、暖かかった。だんだんとそれが強くなっているのを感じる。ノーマルスーツの無機質な暖かさではない。もっと自然に近い、太陽のような。閉じている瞼に光を感じている。どういうことだ？開かないコックピットにこのような光など届かない筈だが…

私は自分がまさか救助されたとは思っていなかったためそんな事を考えていた。そして、私はようやく目覚めた。目が覚めてぼんやりとしたまま、天井を眺める。知らない天井だ、だが、白を基調とした落ち着いた色合い、ここはおそらく、病室、か。そこまで考えた時、目の前に少し白髪の混じった老人が、覗き込むようにこちらを見てきた。私が意識のあることに気付き、目を丸くしている。

「キヤ、キヤスバル様!!お目覚めになりましたか!!ああ、よかった!」

「あ、…ああ、…」

「ああ、本当に、私は感無量でございますぞ！あ、失礼しました。貴方様の前でこのような真似を、ともかくすぐに医者を呼んで参ります。どうかそれまでお待ちを！」

ドタドタと慌ただしく老人が病室から出て行く。見かけによらず元気な老人だなど、失礼な事を思った。私はぼんやりと窓の外を眺めながら医者を待つていた。暖かい陽気に包まれた街が見える。コロニー外壁の、河と呼ばれているミラーが見えるから、何処かのコロニーなのだろうかと、と考えていた。これから私は、どうして行けばいいだろうかということも、含めて。

ガラつと、ドアが開く音がして見てみると、先ほどの老人が白衣を着た私と同一年くらいの白衣を着た聡明な青年の首根っこを掴んで入ってきた。おそらく彼が医者なのだろう。…それにしても、なかなか元気な老人なのだな…

「ああ！キャスバル様！連れて来ましたぞ！さあ、診察を受けてください！出来ない息子ですが、医者としての腕はピカイチですので！ささ！

「つ、ゲホゲホ！」つたく、親父は荒っぽいんだよ、連れてくるだけに、ふう。おれはもうガキじゃないんだから、首根っこ掴むのは勘弁してくれ、親父。

「馬鹿もん！キャスバル様がようやく目覚めたのだぞ！急がんお前が悪い！」

「だからって病院の廊下は走ってはいけないだろ！」

「ここはVIP専用で、いまはキャスバル様以外におらんではないか！」

「そういう問題じゃ、つと、こんな事をしている場合じゃないな。キャスバル様も呆れるぜ。」

「そうじゃ！早く診察を！」

「急かさないでくれ、それじゃキャスバル様、軽くチエツクを行います。こちらからの質問にも出来るだけ答えてください。」

「あ、ああ。」

老人と青年、いや、話からすると息子か、ともかく二人は当人を放っておいたまま、言い合いを始める。少し言い合ったのち、息子の顔が医者としてのそれに変わる。一瞬、私のことはもう忘れてしまったのかと思ってしまったが、杞憂だったようだ。脈を測ったり、聴診器を当てたり、簡単な質疑応答をして、診察は終わった。

「今のところ後遺症などは見られませんね、

まあ、もつと詳しく調べなければ分かりませんが……ともかく暫くは安静に。明日から本格的に検査をします。取り敢えずは親父から聞きたいこともあるでしょうし。うるさい人ですが、まあ我慢して下さい。なんだかんだでキャスバル様を一番心配していましたから。」

「おお、そうであつたな！ではまた後でな、

ベール。頑張るのだぞ！

「言われなくともさ。それでは、キヤスバル様。

「…ああ、…ありがとうございます。」

医者が出てゆき、私と老人の二人になる。喉の違和感が取れない。余程長く寝ていたからだろうか。そう考えながら喉をさする。

「一週間でございます。」

「何？」

「発見してから貴女様は一週間ずっと寝ておりました。」

「そ、そんなにか、ゲホ！なるほど、それだけ喋ってなければ、ゲホ、ゲホ、こうもなるか、ゲホゲホ！」

「ささ！水をどうぞ！なんの特別なものでもありませんがな。」

「いや十分だ。ありがとうございます。く、頂こう。」

老人がコップになみなみと水を注ぎ、渡してくれた。長く動かしていなかった手をなんと動かしてとる。ここまですとはな。まあ、後遺症がなかっただけか。ゴクゴクと水を飲む。素晴らしく美味しかった。漂流が始まって早々に切らしてから飲んでいなかった。ああ、生き返るとはこういった感覚か。水の有り難みを実感する。む、いかな。涙が流れてきた。ふふ、こんなことで涙を流すとは、いかなせん私も涙脆く

なつたものだな。まあ、あんなことを経験すれば、そうもなるものか。

ただの水が入つたコップを持つたまま涙を流すシヤア。以前の彼を知る者なら、こんな姿を想像すらしたことないだろう。それを見て老人は優しく微笑みながらハンカチを差し出す。

「ささ、これでお拭きください。しかし、貴方様もお泣きなさるのですね。

「ありがとう。いや、すまない。みつともない姿を見せてしまったな。ああまで死の淵をのぞくような経験をしたせいで、どうもな。

今までこれを当たり前のように消費していた自分を情けなく思つてしまふ。

「いえいえ。みつともないとなど毛頭にも思つていませんよ。貴方のように漂流していた人は、誰しもこのように当たり前のことで涙を流します。貴方様も同じ様に泣かれたことが、私にとつて嬉しかつたのですよ。命の重みをわかつたからこそ、流せる涙なのですから。特に貴方様の場合は、特に。

「…そうだな。だから、私は涙を取り戻せたのだらうな。

私は自分で言つたその言葉を深く噛みしめる。長く仮面を被り続けていた自分が、何処かへと消え去るような感覚がした。

老人が、私のベッドの側へと椅子を寄せて、座る。しつかりと私をみて、話す。

「さて、本題に入りましょうか。…私が何者なのか、何故貴方を助けたのか、…どれから

お話しいたしましょうか？

「…そうだな、全部話してほしい。ともかく貴方が何者かを教えて欲しい。見たところここはエウーゴ旗下、ましてやジオンの施設ではないようだが？

とはまあ私をキヤスバル レム ダイクンと知っていることから、あらかた見当はついているがな。笑みをたたえながら私は尋ねる。

「そうでしたね。まずここは、私の団体が所有している病院のVIP専用部屋です。そして私は、連邦でもジオンでもありません。貴方様をお救いしたのは私がステオのトップとして当然なことをしたまです。

「ステオ…たしか、宇宙漂流者の救助活動を主とした、NGO、だったか…すまない、あまりよくは知らなくてな。

「いえ、大方の認識はそれで十分ですぞ。まあ、ともかく我々は戦闘が終わってすぐの領域を探索していたら、貴方様を見つけたのです。いやそれはそれは、本当に偶然でした。全く、神の思召しとしか、思えません。搜索に出る前にしっかりと祈りをしてから出港したのですが、その前から少し少し、いいことが起こりましてな、まず出港直前に淹れた茶に茶柱が…くどくど

…老人とは、多弁なものだ。しかしなかなか面白く、聞いていて飽きなかった。まあ、大まかにまとめると、こうだ。

私が漂流していた宙域一体を、戦闘終了後直後から掃海していた老人が、いや、なぜか話の途中で爺やと読んでくれと言われたので、爺やと呼ぶことにする。私からしたらまだ爺という年齢には見えんのだが：ともかく、爺やは私を見つけた。私の百式は、上部部のみ、両腕、頭部損失で、煤くられてほとんど金色の塗装は剥がれていた。コックピット部には大きな艦壁の破片が刺さっていたらしい。私が脱出できなかった原因はそれだったようだ。普通の掃海屋なら、コックピット部の破片など放っておいて、またすぐにでも他の機体を、戦争の、戦いの残骸や残滓であるお宝を集めようと出発し、気にも留めないだろう。掃海屋は、大企業や連邦政府に雇われた、戦後処理のためにスペースデブリ、宇宙ゴミを回収するのが仕事だ。しかし当然だが回収するだけでは儲からない。なので回収したものの大半はコロニーの修理屋やジャンク屋へと売りさばき、価値のあるもの、モビルスーツやその部品、パイロットなどは雇い主である大企業や連邦政府、果てはジオンの残党軍とまでと、取引していた。今のブラックマーケットに流れているものの大半は、彼らのような雇われの掃海屋から流れてきたものであろう。しかし、助かった1番の要因は、爺やがただの掃海屋ではなかったことだった。爺や達は人命救助を第一に考えてデブリを回収する、宇宙漂流者究極救済団体、space d r i f t e r s e x a i d o r g a n i z a t i o n 通称、ステオに所属していた。デブリを回収するのはほかの掃海屋と一緒だが、彼らは人命救助が

最優先だ。金になるならない関係なしに、漂流者がいそうな脱出ポッドやモビルスーツ、果てはモビルアーマーまで、大型艦のような回収できないものは内部調査を行ったりもするそうだ。発見した人がすでに無くなっていたら、軍籍問わずに所属する軍や家族に遺体を届ける。生きていたら治療を施し、軍に戻るか、我々とともに働くかを聞く。恩を感じるものも少なくなく、4割ほどはステオに所属して働くそうだ。その説明の時、爺やは少し言いにくそうな顔をしていた。まあ分からんでもない。あのような状況から救ってくれたら断らないこともないだろう。ともかく彼らは生存者など居なさそうなほどに損傷した機体を前にしてもやる気をなくしたりなどしなかった。慣れた手つきでデブリを除いて、ハッチをこじ開けたそうだ。しかし、彼らも驚いただろうな。ダカールで議会を乗っ取つてまで演説をした男が、こんなところから出てきたのだからな。すぐさま少し離れたところで監督していた艦長である爺やを呼び出したらしい。爺やは私の顔をみてから、騒ぎ出すスタツフに向けて、このことは他言無用だ、それより早く緊急治療室へ運べ と、的確な指示を出してくれたそうだ。これは後で聞いたのだがあと1分でも治療が遅ければ、私は酸素欠乏症で一生物人間だったそうだ。本当に爺やがいてくれて助かった。応急処置を終えたあと、すぐさま艦を近隣のコロニーに帰港させ、爺やと縁のある病院に秘密裏にわたしを入院させた。

「…なるほど、それで今に至るといわけか。…」

「左様でございます。」

「しかし引つかかるな。何故私をエウーゴなりジオンなりにと引き渡さなかつたのだ？ 多少なりとも報酬が得られたらうに、いや、ステオに所属していてもわたしのような軍の高官はすぐさま引き渡す義務があるのではないのか？ それに、いくら治療目的とは言え私を匿うのは危険なはずだ。迷惑なら

自分を高官と言ってしまった時は、少し苦笑いをしてしまったな。いや、一応自覚してもいいはずだがな。ともかく、面倒をかけるようならこちらから出て行こう。なに、自分の足が動けるのならどうとでもなるさ。

「安心して下さい。貴方がここにいることは誰にも知られておりません。」

「しかし、救助隊は爺やだけでは

「ああ、その点は問題ありませんよ。何せ、我らの団員は全員訳ありですから。

「…なるほどな。」

彼らの団員は全員がほぼ私のように救助された人間だ。いくら軍が搜索していなくとも、一応はM I A、戦闘時行方不明として登録はされている。恐らく軍に報告せずにごの団に所属しているのだらうな。…まあ軍に報告したら連れ戻されてしまうだけだらうしな、あんな経験をしてまで軍に戻りたいという奴は正気ではないだらう。現に私だって戻らうとは思わない。…いや、アムロやアストナージには一言言つてやりたい

な、それに減給のことも…ともかく、爺やが言っているのはこういうことだろう。それなら心配は無用か。

「それに、…ああ、言いにくいのですが。その…」

「構わない。言ってくれ。もうどんなことを言われてもショックなど受け

「貴方様の搜索願は、実は出ていないのです。

「ない、な、何?!…いや、当然か…」

「はい、恐らくは…そういうことでしょう。

私は少しの間ショックで固まった、が、すぐさま回転し始めた私の頭脳がそれは当然だとはじき出した。…ジオン出身の、ましてやダイクンの長男たる私が、曲がりなりにも連邦のトップなど、利己的な俗物どもが黙ってなどいないか。奴らにとつて、私の行方不明は願っても無い出来事だったろうな。…つまり私は既に戦死認定されているくらいか。それはわからんが、ともかくノコノコと連邦に出向いたら、私は治療の名の下に抹殺されるだろうな。…ち、減給の件は諦めるか…

爺や曰く、軍の高官を救助したら、一旦は軍に知らせる前に本人に戻る意思があるかどうか確認をしているそうだ。なるほど、だから私もこのVIP専用のところへと運ばれたのか。…しかし、まだ腑に落ちないな。

「何故私をキャスバルの名で呼ぶのだ? いや、名が知られているのは自覚しているが…」

「それは、私が、旧ダイクン派の一員だったからですよ、キャスバル様。

「ではやはり貴方はジオンの

「いえいえ、何度も言っていますが私はステオのトップ、ジオンとは全く関係ありませんよ。…少し、私の話をして構いませんか？老人の、たわいない昔話ですがな。

「…ああ、頼む。是非とも聞きたい。

ダイクン派と聞いて私は目を細める。…今の私はジオンに戻る気などないからな。しかし、そんな目を見て爺やは慌てた。ジオンではないらしいが…ともかく、話を聞こう。

「…ええと、どこから話しましょうかね。ああ、そういえば名乗っておりませんでしたな。申し訳ございません。なにぶん、貴方様が回復なされて嬉しかったもので…ああ、話が逸れましたな。私はキャシー・レオドルトと言います。今はステオを率えています。若い頃はコロニー間航海士、まあいわゆる宇宙飛行士として、コロニー開発に関わっていました。今はただの老人ですが、当時の私はなかなか、イケメンで、腕が良くて、人氣がございました。ああ、あの頃はまだシワが…また逸れましたな。いや、どうも口が滑ってしまいます。ともかく、宇宙飛行士として成功した私はなかなか資産が多くなつていきました。投資もうまくいって、宇宙飛行士引退後に、家族とゆっくり暮らそうとサイド3へ向かいました。そこでたまたま、ダイクン派に入らないかと言われまして…

断る理由もないので入りました。貴方様のこともそれとなく知っておりました。その何年か後に、ダイクン様が亡くなりました。私はザビ家に操られてダイクン派狩りに出た人々が怖くて、家族を連れてサイド6へ逃げました。：うう：あの時は、本当に、申し訳ございませんでした。幼い息子や妻に、何かあつたらと、しかし、貴方様も、まだ、幼かつたのに、私は：

いきなり爺やが泣き出した。顔に手をあてて。流石の私も焦つてしまった。よもや、そこまですかダイクン派に関わつていけないのにも関わらず、そこまで情を感じてくれるとは思わなかつた。：あの時の私は、ラル家しか助けしてくれないのかと、内心怒りでいっぱいだったが、こんな人もいたのだな。

「あ、いや、そこまで気を病まないでほしい。幼いとはいえ私もその時からダイクンの子としての自覚はあつた。それにまだアルテイシアも、母も、居たからな：ともかく私は大丈夫だ。それに、貴方に助けられたからこそ、ここにいます。ふふ、万全とは言い難いかな。

私はベッドから手を伸ばして、老人の肩に手を添える。震える手で肩を持つ姿は自分で見て滑稽だった。まあ事実、万全ではないからな。

「ああ、ありがとうございます。いやはや、なんともまあ、恩返しができた思いでございます。貴方様にそう言っていたらと、この事業を始めて良かったと、改めて感じま

したぞ。

しかしどうしてこの事業を？ 言い方が、あれなのだが、その、あまり儲けのいいものではないと思うのだが、その、助けられた私が言うのもなんだが：

「はははは！ 気を使わなくて結構ですぞ！ はつきり言うと、この事業はほとんど自転車操業に近いですな。現に団員の給与は時々私の財産を切り崩して支払っています。ま、団員は私を含め、200人余りしかいないので、そこまで苦しいものではないのです。皆もよく文句も言わずに働いてくれているものですわ。ま、私もその内の一人ですが。ガハハハ！

「そ、そうなのか、

…爺やは喜怒哀楽が激しいな。しかしこの明るさと優しさがあるからこそ、皆辞めないのでらうな。

「しかし、何故始めようと？ 聞くのは失礼かもしれないが、教えて欲しい。頼む。

「はっはっは！ 貴方様はお優しい方ですね。もつと遠慮せずに聞いてもよろしいのに。まあ、きつかけは、私の妻ですかね。

「妻…

「サイド6は知つての通りすぐに中立を宣言したので安全に暮らせました。まあ私はじっとしてるのが苦手だったので、ザビ派に奪われた分の財産を増やそうと、コロニー

会社のランチの運転手をやっておりました。そしてたまたまグラナダまで行くことになりまして。その時はもう戦争も終盤に近かったので、妻を残して息子と二人でグラナダへと向かいました。息子はその頃医者もどきのようなもので、グラナダの医療機関で修行のようなものを受けるから、ついでに乗せていたんです。しかし、それが甘かったのです。グラナダに着いた時、中立であるサイド6にジオンの特殊部隊が潜入し、連邦と戦闘状態に陥ったというニュースを見ました。わたしは肝が冷えました。すぐさまサイド6に帰ろうとしてのですが、その時、タイミング悪く、ジオン和平派の先遣隊が到着するとなつて、港は騒がしく、なかなか出発できなかつたのです。なんとか許可が下りたのは、そのニュースを見た数日後。詳しくは分かりませんでした。機密保持だとか何とかで。私と息子は不安でいっぱいでした。コロニーにつき、すぐさま家に向かいました。幸い家は無事でしたが、妻はどこにもいませんでした。近所の人から話を聞いて、最後に見かけたのは繁華街のデパートの前だとわかり、そこへ向かいました。そこは何もありませんでした。一面黒焦げでした。まるい大きな穴が開いていて、灰色のいかにも急ごしらえな壁が見えていました。ちょうど、デパートだったものの残骸の前の道路だけがそうなっていました。交通を整理している警官に話を聞くと、どうやらここに連邦のモビルスーツが落ちてきて、爆散したと。あまりの衝撃に、ここだけコロニーの外壁まで貫く穴が開いたと。幸い小規模なため、すぐに自動修復装置が働いて穴は閉

じたそうです。しかし、私はピンとききました。恐らく、妻はその時に、宇宙へと放り出されたのだろうと。家に戻ると妻の手帳には、私と息子の帰還祝いのプレゼント購入、との文字が、爆発があつた日の時間帯に記入されてありました。私はもう呆然として、動けませんでした。こうも簡単に、数日前までは普通に笑っていた、妻が、なにも残すものなく、前触れもなく消えたのですから。しかし息子は泣きながら私の胸ぐらを掴み上げて、母さんを探しに行こう、と私に言いました。なにを言ってるんだ、と言おうとしたのですが、息子の目は真剣そのものでした。

ひとりぼっちにしては、可哀想だ。私は息子の言葉に震えました。無言で頷いて、すぐに乗ってきたランチに乗って宇宙へ出ました。

はつきり言つて、無謀の他何でもないですね。どこへ行つたのか、手がかりさえもないのに探し出すなんて。しかし私と息子は絶対に探すことを諦めませんでした。いや、他に考えたくなかつたからかもしれないね。見つからなくて、時間だけが過ぎて、二日たった頃、話を聞いた周囲のジャンク屋やコロニー公社の同僚が手伝ってくれるようになりました。同僚は仕事をサボりたいからだとか、ジャンク屋はあんたが金持ちだからとか言っていました。私は本当に嬉しかったのです。そんな言葉とは裏腹に、彼らはプロの所業で探し続けてくれましたから。そして三日目に、漸く見つかりました。直近で爆風を受けたのでしよう、煤かけていましたが、顔を見てすぐにわかりました。船

に収容して、体を拭いてやろうと妻をよく見ると、何かの袋を抱いていました。まさかと思つて息子と二人で袋の中を見ると、中には私たちへのプレゼントのハンカチが入っていました。きちんとイニシャルがされていました。2つともチェック柄の、赤と青。私と息子の好きな色でした。そして手紙がありました。息子へは医者として人を救え！と、私へは仕事を頑張るのはいいがもう少し休め！と。快活な妻らしい文章でした。二人とも堰を切つたように、一時間近く泣きました。今でも大事に使つていますよ。大切な、思い出ですからね。その後、なんとか立ち直つて、同じように泣いてくれた同僚やジャンク屋に礼を言つて、無理やりお金を渡して家に帰りました。葬儀を終えて一週間後、息子は、グラナダへと渡りました。人を救つてくる。と、笑つて私に言つてからいきました。そしてふと気がついたのです。普通の人は私のようなことが起きても泣き寝入りするしかないのでは、と。当時は、私のように専用のランチを持つている人など

ほとんど居ませんでしたからね。また、こんな搜索をしてくれるようなサービスはどこにもないんだと。そのために今も、宇宙を彷徨い続けている人が大勢いるのだと。そして私は決意しました。そのような人々を家族の元へと戻す事業を始めようと。しかし一人ではできないので、搜索に協力してくれたジャンク屋と同僚にどうしたらいいか相談すると、なんと自分たちも入れてくれと言つてくれたのです。話を聞くと、彼らも

家族を一年戦争初期に、私と同じような出来事で無くしたそうで、軍や政府に掛け合っても全くもって動いてはくれず、そのままあきらめてしまったと。もう昔のことだとほとんど忘れていたが、私の諦めずに探す姿を見て思い出し、感動すると同時に、後悔の念が湧いたそうです。まさか自分から探しに出るといふ考えが、当時はなかったのでしょうか。ともかく、自身の罪滅ぼしのために、あわよくば家族を見つげるためにも、自分たちを仲間に入れてくれと。今思い出せば少し恥ずかしいのですが、いい年した大人たちが10人ほど泣きながら堅く手を握りました。とまあ、そんなことからステオの前進が始まりました。最初はそんな感じで、休みの日だけ何時間か行うくらいでした。皆んな仕事がありましたからね。それも人命救助でなくジャンク集めのついでという体面を特定して、家族の元へと返す。そんなことを繰り返していました。時々回収する遺体は大きく変わりました。段々と企業やコロナー公社が支援をしてくれるようになってきました。なんでもデブリが減ってコロナー間を行き交う船の損傷率が下がったとか、遺体の回収の事とかを地元の新聞が報道したらしく、私達は一躍人気者になりました。他のコロナーにも来てくれと要請がかかることも増えました。まあ、ていといい掃除屋程度にしか、思われていなかったと思いますけどね…

ともかく出動の頻度がどんどん増えて、団員も増え始めて、休みの日だけとは言い難

くなりました。初期メンバーで話し合って、この勢いに乗ってもっと事業を拡大していくことになりました。資金も遺体を届けた先が資産家なら、なかなか額をカンパしてくれたりしましたからね。船もランチから連邦がただ同然でくれたコロンブス級巡洋艦に変わりました。まあ、楽しくやってみました。騒がしい連中ですが、わたしもそんな雰囲気が好きだったんです。言い方はあれですが、私達が発見するのは遺体ばかりで、急を要するものなんかほとんどありませんでした。生存者を助けることなどなかったですから。しかし二、三年ほど前から、緊急脱出ポッドを発見するようになりました。一年戦争の頃にはなかったモビルスーツへの脱出機構搭載の必須化が始まったのがその頃らしいですね。まあでも、その時の私達の中に軍人は居ませんでしたので、本当になんなのかわかりませんでした。私なんか、UFOに違いないと言い切って、ポッドについているエンブレムを拡大して見せさせられて笑われました。全くあの時ほど恥ずかしかったことはありませんわ！はっはっは！おっと、またそれました。ともかく回収して調べると緊急脱出用ポッドとわかって私達は大慌て。何とかハッチを開け、中にいたパイロットを引きずり出して、大急ぎでコロンブス級に積んである高速艇でコロニーの病院へと運びましたね。助けたパイロットは一命を取り留めましたが、極度の閉所恐怖症になってしまいました。もうパイロットとしてはやっていけないと自覚して呆然としてましてな。まだまだ若く、体格のいい青年なのに、もったいないと思ひまして

な。それならばうちで働くかい？と半分冗談でわたしが言ったら、とんでもなく真面目な顔で頷いたんですよ。恩返しもしたいし、テイターズにはもう戻りたくないし、ちようどいいと。そのかわり軍には伝えなくてくれと。まあ、一人くらいいいいかと、その時は思っていました。しかし、その日を境にポッドがわんさかわんさか、見つかるようになりました。しかも毎日。ニュースでは、テイターズとエウーゴの戦争かと、流れていたのがその頃でしたね。ともかくですね。私達は本当に忙しくて大変でした。今までと違って、ポッドは命の塊ですから。それに時間との勝負でもありません。助けられなかった命もありますが、悔やんでいる暇はありませんでした。しかし不思議な事にはすな。始めの方は、助けたパイロット達の7割が軍に戻ると言って戻ったのですが、段々と戻る奴が減ってゆきました。遂には助けたパイロット全員が、私達と働いたいとまで言ってきたのです。しかも、エウーゴやテイターズ、果てはジオン残党やネオ・ジオンまで。階級も関係なくなりましたね。今ではうちに、二等兵から中佐までいますよ、まあ、元ですがね。一度救助したことのある奴まで現れて、彼らなんてハッチを開けてそうそうに自分を雇ってくれと、自分から言い出して来たんです。流石に私達もおかしいと思つて聞いてみると、何と彼ら全員笑いながら、軍が嫌になつて逃げ出したかつたから、わざとやられたんだと申し上げてきました。私達は一通り笑つてから、暖かく迎えてやりました。彼らの笑いには恐怖が混じつてましたからな。嫌になつ

たのでしよう。モビルスーツという棺桶に入りながら、手に血のつかない人殺しをする、戦争が。私達も軍には勿論生存の報告はしませんでした。代わりに本人達の、わざと血をつけたメットや階級章、ドッグタグを送って死亡報告はしましたけどね。そうしなければ意味がありませんから。彼らの多くは家族への仕送りのために軍に入ったものがほとんどです。しかし、戦いが嫌になったからと言って脱走すると、捕まる可能性もさることながら、家族への仕送りができなくなりますからな。そんな時に、私達の仕事が伝わったそうです。おそらく、私達に回収されてから軍に戻った奴が考えて広めたのでしょうな。ステオに回収されたら、そこで働ける。しかも死亡報告をして貰えば、家族へ多額の死亡給付金が支払われる。自分は働いた金で、家族をそこへ呼べばいい。

というふうに、まあ一種の亡命ですな。エウーゴとティターンズの、最近ではグリプス戦役と呼ばれておりますな。中盤あたりから精神に限界がきたパイロットがたくさんこの方法で私達のところへ亡命、いや、救助されにきました。自作自演でやられた奴や、あまり損傷しなかったので隠してきたが、金になるから取りに行こうと言って自分の機体を回収する奴まで現れて、もう笑うしかありませんでしたが、私達は嬉しい限りでした。救助された彼らは皆、以前と比べようがないほど元気になりましたしな。若い連中も増えて騒がしいですが、私のような年寄りからすれば、嬉しくて仕方がないのですわ。彼らを本来の、平和な世界でならこうであった姿に戻す事が出来たのですから。しか

しなるとも可笑しいものでした。回収するたびに団員が増えるので、どんどん回収効率が上がって、ジャンクを売る方の収益がどんどん増えましたからな。ま、その分雇う人数も増えたので、どっこいどっこいですわ！はっはっは！今では適材適所で、皆働いていますよ。

パイロットでもとりわけ上手いものは回収班。ポッドは精密機械のようなものですからな。元特殊部隊出身や狙撃が得意な者は強制鎮圧班。ポッドだけでなく、半壊したモビルスーツごと漂流している場合、残っている武装で私達を攻撃する可能性もありますからな。まあ、大半は錯乱しているので呼びかけても無駄なので、遠距離から武装だけを破壊するのです。彼らはすごい腕ですからな、殺さずに安全なですよ、いつも頼りにしてる連中ですわ。あと、ほかのパイロットは緊急時戦闘班。ポッドをねらう輩がないわけでもありませんからね。戦前医者だったものや元医学生は治療班。メカニックや元工学生は開発班。彼らには毎日、新しい人を救う発明をしてもらっています。戦争に利用されないのならいくらでもと、毎日徹夜するような連中では、いい意味で困ってますわ！あと、戦闘がどこで起こったかを調査する、元軍のスパイや元公安など、諜報活動のスペシャリストがいる諜報班。元コックたちの食料班。

戦闘よりも事務が好きなのは経理班。他にも宣伝班や、最近ではアイドル班なんかも出来ましたな。まあ、私としてはもう、好きなだけ大きくなって、どんとこい！とい

う具合ですわ！やり甲斐もあるし、なんといつても楽しいですからな！息子には少しや
り過ぎだと、呆れられてはおりますが、はっはっは！

ともかくそんな毎日を送っていたら、貴女様を発見した次第でございます。如何です
かな？

爺やが話し終わつたとき、部屋には夕日が差し込み、夜の帳が降りかけていた。それ
だけ時間が経っていたのか：気がつかなかった。それほどまでに、爺やの話は私の想像
以上だった。成る程、これだけの過去が、人の思いが、歴史が、優しさが、積み重なつ
て、集まつて、道となる。これが、これこそが、未来であり、私の成すべきことなの、だ
ろうか……

「…話してくれて、本当に感謝する。いや、世辞抜きで、いい話だった。だから私も助
かつたのだろう。こんな、過去に囚われていた、私が。」

「過去に？はて、少なくとも、この爺めには、そうは見えませんか。貴女様には今、未来
が満ち溢れておられます。」

「…どうして、…そのように見えるのだ、」

「何故なら今、貴女様が流れているからでございます。」

「な……に……そんな……」

爺やに言われて気がついた。私は、爺やの話を聞き、泣いていた。あまりにも静かに流れる涙に気がつかなかった。

「過去に囚われているものは、優しい涙は流せないものなのですよ。」

「優しい…涙…」

「だから、優しい涙を流す貴女様は、今、未来に向かって生きようとしている。私はそう感じましたがな。」

「…未来、か、…」

優しい涙が頬を伝う。涙で視界がぼやけるが、それはまるで、まだ見ぬ未来の、蜃気楼のように感じた。ぼやけていても感じる暖かさに、また、涙した。

「さて、年寄りが少し話し過ぎましたな。もう寝たほうがよろしいでしょう。明日からまた、診察があるようですから。貴方様がこれからどうしていくかも、また明日お伺いすることにしましょう。私は貴女様がどのような選択をしようともお支えますよ。ではまた、明日に。」

「…待つて欲しい。」

爺やが椅子をしまつて、部屋から出て行こうとする。しかし、1つだけ、言わなければならぬ。私の、私自身の決意を、未来を

明日を。

「なんですか？」

爺やは少し驚いた、けれども優しい笑みを浮かべて私を振り返る。

「…一つ、頼みがある。

「ははあ。どうぞどうぞ、私の出来る限りなら、何なりと。

「…私を、あなたのもとで働かせて欲しい。

「…」

一瞬の静寂ののち、爺やは私の言葉に目を丸くして、大声で笑った。爆笑とはこのことかと実感した。

「ハーツハツハツハツ!! はは、ま、まさか、貴女様、まで、ははは！こりや傑作ですな！

ははは！くくく、くくく！

「そ、そこまで笑うことはないだろう！私は、本気なのだぞ！

あまりに笑われ過ぎなものなので、流石に私は少しだけ怒ってしまった。…こちらは頼んでいる側なのに、情けないな。しかし人が本気で頼み込んでいるのに、それを笑うなどと

「ハハハ！おつと、し、失礼、ふふふ、ふう。…いやあ、どんなことを頼まれるかと思えば、そんなことだったの。くくく、ふふふ、

ふう、と息を吐いて爺やは呼吸を落ち着かせる。息を吐くとともに、表情は真剣なも

のに変わる。少し考えるそぶりをしてから、爺やは喋り出す。

「……………キャスバル様、私は確かに、救助した者の殆どがうちで働くとは言いましたが、強要しているわけではありませんよ。ましてや、貴女様のような人にとって、このような状況では、ほかに成すべきことがあるのでは？」

…爺やが言うことも最もかもしれない。連邦は事実、弱っている。これは間違いない。ジオンにとつては千載一遇のチャンスだ。私がハマーンのもとへとゆき、合流すればジオンの再興も現実となるだろう。地球圏から連邦を追い出すことも。私にとつてそれは本望でもある。地球を汚す愚民を、地球から排除できるかもしれないのだ。しかし、しかしそれでは、私は変わらない。戦いによつて、それを得ては、意味がない！再び過去に囚われ、のうのうと生きて行くだけであろう。それではいけないのだ！漸く、漸く未来を、成すべき道を見た、私は！それを掴むためにも、私はここへ来たのだ！遣わされたのだ！だから！

「過去のしがらみから解放された私は、ここに、未来を見た。過去に縋るジオンでなく、腐敗の道しかない連邦にはない、ここに。私の、成すべきことがある。…まだ、はつきりとはわからない。だが、ここでなら、掴める気がする、いや、掴んでみせる！頼む、私に、未来を与えてくれ！

全力で言い放った。私自身の、過去の、未来への、決意だ。これは、曲げんよと、意思を込めて。言い終わった後、私は肩を上下して息をついていた。万全な状態でも、そうなっていただろう。爺やは穏やかな笑みを浮かべながらゆっくりと頷いた。

「わかりました。それが貴女様の決断ですね。なら、私達は歓迎するだけでございます。ようこそ、私たちステオに。ただし、入ると言ったからには、しっかりと働いてもらいますぞ。

「無論だ。こき使ってくれて構わない。一応、これといってできないことはないつもりだ。

「ではまず、上司である私に対して敬語を使ってもらいましょうかね。

「は！すま、いえ、申し訳ありませんでした。今までのご無礼、どうか

「はっはっは!! いえいえ、冗談でございますよ！ はっはっは！

爺やはまた笑い出した。流石の私も少し不愉快、いや、なんだ、この、ええい、なんだ！ この感覚は！ 老人の手の上で踊らされているような、く、これが、老いか…

「…あまり若者をからかわないでもらいたい。

「ああ、申し訳ございません。いけません、口が緩くなりました。いやあ失礼を。しかし、この話し方は二人の時だけお願いしますぞ。いくらなんでも新人の若者だと流石に

「ああ、それは分かっている。…しかし本当に構わないのか？ 私のことをよく思わない者もいるだろうに…」

「ああ、その点は大丈夫でございます。なにぶん、訳あり者が多いので、ここでは私たちは皆、過去に触れませんので。」

「…成る程、そうでなければ成り立たんか。」

飯にも元とはいえ、エウーゴやテイターズ、ジオンと、元敵同士が集まるのだ。過去を気にしていればできることもできない。当然か。

そこまで考えたとき、私は急激に頭が怠くなってきたのを感じた。眠気だ。長時間話を聞いた今の体は休息を求め始めた。自然と、瞼が閉じ始める。

「おお、申し訳ありません。老人が、喋り過ぎましたな。ともかく今はおやすみなさってください。また、明日から決めていきましよう。これからは。それでは。失礼しますぞ。」

「あ、あ、ありが…と……………」

言い切る前に私は力尽きた。瞼が完全に閉じる。しかし、伝わった筈だ。暖かな夕日に包まれながら眠るのはとても心地の良いものだった。まるで、幼い頃、母にだきしめながら寝た時のような。沈んでゆく意識に、妙なものを感じとった。なんと言うべき

か、これは、明日を迎えるのが、楽しみという感情。そうか、これが、未来を生きるということか。明日に希望を持つという。これが…

シヤアは穏やかな表情のまま眠る。∴いや、シヤアであつたものといつたほうが正しいか。復讐の仮面を取り、未来を生きると決意をした彼は、果たしてこれから何を成すのか。